今月の窓

地域主体の結節点としての農協

実家のベランダで育てているサクランボや桃といった果実は、気を付けていないと収穫直前に鳥に全部食べられてしまう。都内のマンションのベランダでもそうなのだから、中山間地の農地ともなれば鳥獣被害はいかばかりか。以前、集落営農法人を調査した際に聞いた「イノシシの餌を作っているようなもの」という嘆きが今も耳に残っている。

今月号の藤田論文「農協系統の獣害対策と地域内外の連携」は2020年６月号に続き、獣害対策における農協の役割について焦点をあてている。今月号では、農協が地域内外の様々な組織とも連携しながら対策を行う事例を紹介しているが、興味深いのは獣害対策に取り組むなかで、農協の組合員組織の活動が活発化したり、他組織との連携の輪がどんどん広がったりしていることである。それについて、藤田は「農協は、こうした地域内外を結ぶ結節点の一つであり、その位置を生かし、さまざまな地域の主体的な取組みを促す仕掛けをつくっていくことが、地域の獣害対策において重要な役割の一つとなる」と述べている。

本誌21年５月号の野場論文「豪雨災害地域の農業復興に果たす農協の役割」では、豪雨災害に見舞われた農協が、専門部署を中心に行政やNPOと連携しながら、被災農家を支援する事例を紹介した。その論文の結びでも、農協は「自らが共助として地域社会に貢献をしつつも、行政による公助や他団体による共助との結節点としての役割も担っているとみることができる」と指摘している。

示し合わせたわけではないのだが、両論文では「結節点」という言葉を用いている。これは、農協が内外の他組織と連携しながら様々な活動を行っている事例を考察するなかで、浮かび上がってきたキーワードである。

そして、結節点としての役割を果たす場合に必要になるのが、本誌21年２月号石田論文「人手不足に直面する地域の『受援力』向上を目指して」で指摘する「受援力」である。「受援力は、地域外部からの関心・支援を受け入れる際に必要なポイントを整理する概念であり、地域内での情報収集とその情報の集約・調整を通じた課題・ニーズの明確化とこうしたニーズをスムーズに満たすための施策を実行する体制構築を重視する」ものである。

３本の論文はいずれも、地域社会の問題がより複雑化したり自然災害の被害が甚大化したりするなかで、農協が単体として取り組むだけでなく、課題や被害を十分に把握しニーズを集約したうえで、他の組織とも連携して対応することが必要になっていることを示している。

そして今月号の小野澤論文「所有権の構造からみた協同組合」は、協同組合共通の特徴を「所有権理論」の枠組みを参考に整理することを試みているのだが、異なる協同組合グループの間で共通の特徴に関する認識が高まることが、協同組合間連携の促進にもつながると論じている。

こうした理論面での研究も踏まえながら、いずれ農協の現場での活動の共通点を拾い上げ、結節点として農協が果たしている役割の全体像を示すことにも取り組んでいきたい。

（（株）農林中金総合研究所 調査第一部長　重頭ユカリ・しげとう　ゆかり**）**

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/